

野上弥生子（1885—1995）の戯曲『腐れかけた家』（昭和2年『改造』5月号）は、日本でのチェーホフ受容の一齣をなす。『櫻の園』を含む米川正夫訳『チェーホフ戯曲全集』（岩波書店）下巻刊行が大正十五年九月十五日。ロシア地主階級の没落を描く『櫻の園』に作家が着想を得た裏には、明治女学校時代以来の親友「大地主のお嬢さん」工藤哲子を、その盛岡は大更（おおぶけ）の生家に訪ねた経験があった。大正十五年九月二十一日の日記には「チェホフ。櫻の園をよみながら工藤家のことがふと頭に浮かんだ」と見える。田村道美氏の研究によれば、さらにこの作品にはヘンリー・デイヴィッド・ソローも影を落としているようだ。作中の大地主の跡取り、塚本は「米国の鉄道の枕木の下には、一本々々に愛蘭土の労働者の死體が横たはつてゐる」というソローの言葉の意味が、自ら父の跡を継いで始めて身に染みた、と述懐する。ウォールデンは人跡未踏の僻地どころか、すぐ側を鉄道線路が通っていたことも露呈する一節だが、櫻と死體、ときて思わぬ妄想が働いた。

梶井基次郎の有名な文句に「櫻の樹の下には屍體が埋まつてゐる！」というのがある。これ、ひょっとするとチェーホフとソローの合成ではなからうか。ソローの著作の英語教科書版を編んでいたのが、他ならぬ弥生子の夫、豊一郎で、高生梶井が秘蔵していた教師である（ただし「屍體」の下りは教科書版には収録されず）。「櫻の樹の下には」の原稿は湯治に来ていた湯ヶ島から、昭和五（1930）年九月十三日づけて、麻布にいた北川冬彦に送られたという。石原八束の伝えるところでは、三好達治が、自分の着想を梶井に語るや、基次郎が一晩で書き上げたもの、ともいう。彼らのあいだではロシア文学談義は日常のことだった。

従来から、例えば尾竹竹坡の三幅対の作品（大正九年）に、中央の樹木の下に屍体を配した絵画が指摘されてきた。当時日本で流行（『月映』）のムンクはじめ、樹の根元に動物の死骸を配した工夫には枚挙に暇ない。地中の体内から糞分を

連載
⑥
桜の下の幻想
梶井基次郎全集の余白に

芥川

国際日本文化研究センター
総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美

吸い上げる生命樹の意匠は、冬蟲夏草にも通ずる。鈴木貞美はボードレールの『パリの憂鬱』にみえる「腐肉のために肥え太った華麗な花々の絨毯」といった表現に基次郎が接した可能性も示唆している。そうした幾多の靈感性のなかに、野上弥生子の半ば忘れられた戯曲も——戯れに——加えてみてはどうだろう。

『櫻の樹の下には』の著者（1901—32）と坂口安吾（1906—55）の『櫻の森の満開の下』（1947）を結びつけるばかりか、先行作品として芥川龍之介（1892—1927）の『神神の微笑』（1923）でパードレ・オルガンティノの目に魔物めいて現れる枝垂櫻（しだれざくら）にも言及したのは佐伯彰一氏（鶴田欣也・平川祐弘編『アニミズムを読む』[新曜社]。件の枝垂櫻、八坂神社の巨木ではないか、との連想も遅くされるが、その夜の不気味なまでの美しさは、宇田荻郎も描いたとおり）。佐伯氏はさらに宇野千代（1897—1997）の『薄墨の櫻』（1975）に、かつては基次郎との仲を噂されもした女流作家の、基次郎の「櫻」への追悼・鎮魂まで読み込んでゆく。櫻にまつわる物狂いとなれば、世阿彌元清作と伝える『櫻川』。坂口安吾に言わせれば、狂女は「子供を探して発狂して櫻の花の満開の林の下へ来かかり見渡す花びらの陰に…狂い死にして花びらに埋まってしまおう」。『薄墨の櫻』も登場人物たちの屍を栄養にして復活する。だがそれは決して単なる文学的比喩ではなかった。韓国の「ナヌムの家」を訪れた人ならば、覚えていることだろう。桜の幹に縛られて銃殺され、桜の根元に崩れる男女を描いた絵を。「桜」の帝國がいかなる暴力として表象されたかは、これらの証言が無言に突き付ける。

以下は蛇足。基次郎が京都丸善を爆破すべく爆弾——『檸檬』——を買った果物店まで、研究者は当たりを付けている（京都市役所の裏手）。その向かいは今では、Le Bouchonというフランス料理店になっていて、パリの居酒屋の家庭的雰囲気を手頃な値段で楽しめる穴場である。

思
考
の
隅
景

散
漫
小